

【研究主題】「全職員が全校児童を指導・支援・見守る『多様な学び』の創造」

【副題】～「ローテーション」「シャッフル」が生み出す多様な価値観との出会いを通して～
【学校・団体名】長野県 上水内郡 小川村立小川小学校
【役職名・氏名】校長 永井 宏樹

1 研究のねらい

(1)はじめに・学校概要(令和3年度現在)

小川小学校は、全校児童数 73 名、学級数 8 学級(特別支援学級 2)、職員数 20 名(含支援員等)の一村一校によるいわゆる山間地小規模校である。

① 学校教育目標

『心も体もすこやかにして 自ら学ぶ子ども』

② 今年度のテーマ及び教育重点目標

『笑顔 輝く 小川っ子』

～めざせ！笑顔・挨拶 世界基準～

重点① 子ども主体の探究学習『小川スタイル』で
自ら学ぶ力育成【わくわく学び合い】

重点② ちがいを尊重した、多様性ある

『小川プライド』育成【にこにこ輝き合い】

重点③ 『小川から世界へ』に向けて、未来を
切り拓く力育成【ときどき響き合い】

(2) 固定化された人間関係の打破

本校は近隣の多くの山間地小規模校と比べて、まだ全校児童数は多く、村費加配により職員配置にも恵まれている点も多い。穏やかで素直な子どもたちが多く、保育園から中学校までほぼ同じメンバーで過ごしているため、お互いのことを十分に分かり合い、仲よく過ごすことができている。しかし、その一方で閉鎖的な社会の中で、固定化された人間関係が大きな課題となっている。それに伴い、自分自身に自信がもてずにいる、新たなことに挑戦しようとする際に尻込みしてしまう、何かを学んでいく際に主体的でなく、受け身的な姿勢になってしまいがち等の姿も見られる。

そこを変えていくことができるのは「人的環境」と捉えて、多様なかわりにより、楽しいと思える「多様な学び」の場を設定できるのではと考え、教科担任制・フロアチーム担任制に取り組み始めた。

(3)小川小スタイルの教科担任制を探る

小学校においては、中学校と同様の全教科に及ぶ教科担任制は、中学校のような教員配置がなければ実施困難である。多くの小学校では、

①特定教科の専科による部分的な教科担任制

②学級担任間の授業交換による部分的な教科担任制

の組み合わせで実施している。本校は単級の小規模校のため、通常の場合専科教員は1名しか配置されない

ところであるが、村費常勤講師の専科教員2名加配。そこで、A音楽家庭科専科が音楽(1～6年)と家庭科(5・6年)、B理科専科が理科(3～6年)、C体育専科が体育(1～6年)を担当している(BとCが村費)。更にA音楽家庭科専科が外国語(5～6年)及び外国語活動(3～4年)の授業をALTとともに担当。専科教員による学年や発達段階に応じた専門的、系統的な指導が、子どもたちの学びへの意欲につながっている。しかし、専科教員による教科担任制は、「人的加配による恩恵」と捉えられてしまい(特に2名の村費常勤講師加配とすべての授業にALTが参加する点)、学校運営の工夫や研究に当たらない部分もある。

そこで、ここでは主に②の学級担任間の授業交換による教科担任制の部分に焦点をあてて、「全職員が全校児童を指導・支援・見守る『多様な学び』の創造」を模索したいと考えた。

2 研究経過および内容

今回の研究については、キーワードとなっている「ローテーション」「シャッフル」である。これは偶然性の要素が多分に含まれており、これらが生み出す多様な価値観との出会いが固定化された人間関係の打破にもつながるのではないかと試みた。

(1)フロアチーム担任制・連学年交換授業の導入

～副担任も含めた複数支援体制の確立～

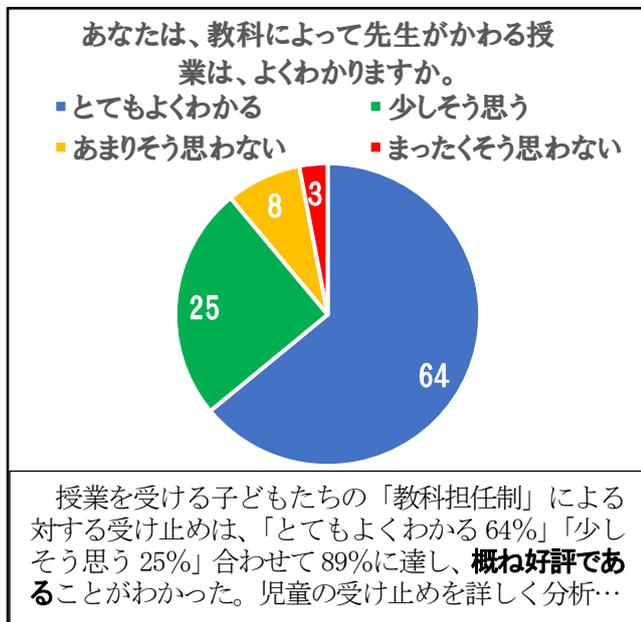


本校の校舎の構造から、連学年の教室は同じ階にあることを活かし、連学年の子どもたちを2名の学級担任の他、低・中・高学年に分かれた特支学級担任2名、専科教員3名、養護教諭1名が副担任としてチームで指導・支援にあたっている。毎週行われている低・中・高学年会では、翌週の予定の確認、諸活動の打ち合わせだけでなく、児童についての情報交換も大切にして

いる。また、連学年内では、教科担任を交換して授業を実施している。高学年では、6年担任が5・6年の国語と5年の道徳を、5年担任が5・6年の算数と6年の道徳を担当。中学年では、3年担任が3・4年の国語と4年の道徳を、4年担任が3・4年の算数と3年の道徳を担当。低学年では、1年担任が2年の道徳を、2年担任が1年の道徳を担当。

このように本校では、「理科」「音楽」「家庭科」「体育」「外国語活動・外国語」の5教科を専科教員による教科担任制、「国語」「算数」(以上中学年・高学年で)、「道徳」(全学年で)を学級担任間の授業交換による教科担任制をスタートさせた。

4月から9ヶ月経過した2学期末に実施した児童アンケートの「教科担任制による授業」の評価は次の図の通り。



【児童の受け止めや育ちのよさ】

- 色々な先生に教えてもらって楽しい。
- 学級が落ち着くことで、学習に集中できる。
- 専門の先生が受け持つことで、技能が向上する。
- 相談できる先生、関われる先生の幅が広がった。
- 分かってもらえる目や安心の場が増える。
- 自分に合う授業(先生)があると、意欲をもって登校することができる。

【児童の受け止めや育ちの課題】

- 担当する先生によって、授業態度が違い、うるさくなることもある。
- あまり接していない先生には、質問等しにくい。
- その先生のやり方に慣れるまでに時間がかかる。
- 担任との強い信頼関係に基づく不登校児童等は不安になる。

→配慮を要する児童についての情報交換と協働がより重要になってくる

更に保護者アンケートから浮き彫りになった保護者の受け止めは次の通り。

【保護者の肯定的な受け止め】

- 担任の力量に課題が感じられても、教科指導については教科担任が指導してくれるので安心できる。
- 学力向上の願いがあり、好意的に受け止めていただいている。
- 複数教員による対応を評価いただいている。色々な先生とかかわることで視野が広がる。
- 担任と気まづくなっても他の教科の時に気分を変えられる。

【保護者の不安】

- 家庭訪問や個別懇談会、授業参観後の学級懇談会は学級担任が担当するので、教科担任と話せる機会がなかなかもてない。
- 教科担任と折が合わない場合は、その授業に行きたくなくなる。教科担任によって教え方に差がある。
- 家庭学習等の量や内容について、教科担任には直接言いづらい。
- 子どもによっては慣れるのに時間がかかるので勉強が遅れないか心配。

→丁寧な説明、相談窓口の明確化などが必要

一方、授業を行う教師側にとってもそれぞれの担任が毎日連学年の授業を受け持つことで、教師がもつ専門性を一層磨くとともに、教科の系統性を意識して指導するようになってきている。また授業の中で感じた子どものよさや気づきを日常的に話題にすることで、学級担任がこれまで気づけなかった子どものよさや新たな一面を知り、子どもを見つめ直すことができるようになってきた。更に学級担任の捉えがそのまま子どもの姿とすることがなくなり、多面的な見方ができるようになってきている。

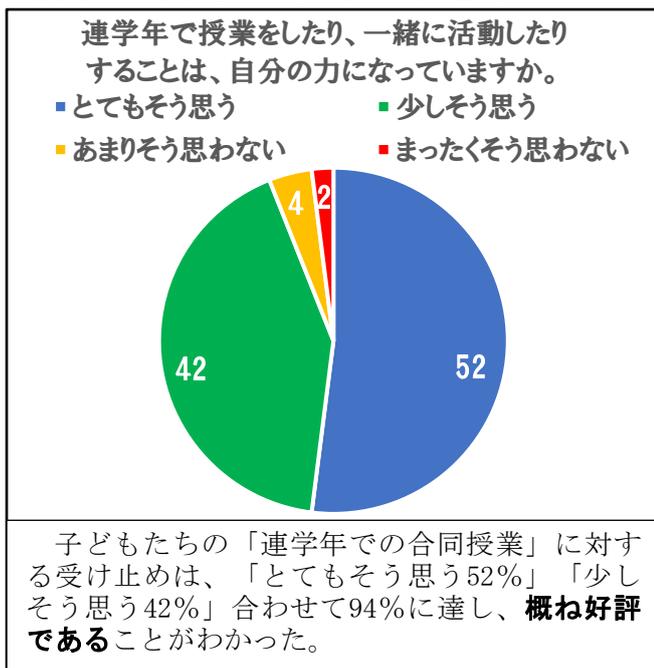
このことは子どもたちにとっても自分を知ってくれる先生が増えて、よいところを学級担任以外の先生からもほめてもらいながら、安心して学校生活を送ることにつながるのではないかと考える。

(2)連学年での合同授業の推進

～異学年「交流」から異学年「学習」へ～

体育は、体育専科教員と特支学級担任の2人体制による連学年合同授業を通年実施している。連学年での合同授業により、子どもたち同士が今まで以上によい刺激を受け合って、学習や活動そのものも、また友だち同士の教え合い・支え合いのかかわりもより活性化につながっている。また2人体制で指導しているため、マット運動や鉄棒運動等ではそれぞれの場で複数の教師の補助が得られるよさを子どもたち自身や教師自身が感じ取ることができている。また音楽(音楽会に向けて)、図工、生活科なども、ねらいや単元によっては連学年合同授業を工夫して実施している。

2学期末に実施した児童アンケートの「連学年合同授業・合同活動」の評価は次の図の通り。



小川小学校は、伝統的に縦割りの「すこやか班」による外遊びや清掃、きょうだい学級による活動がとて盛んで、異学年・異年齢のかかわり＝「交流」は、従来から教育課程にしっかりと位置付けていた。しかし、今回は連学年合同授業を通して、異学年「交流」から異学年「学習」へと発展し、今後更に少子化が進んだ際に直面する複式学級における学びのあり方にもつながっていくのではと考えられる。

(3) 支援体制の「ローテーション」「シャッフル」～多くの職員がかかわれるシステムづくり～

① 授業での支援体制の「ローテーション」

全学年で国語、算数、理科では教科担任のほかには支援員・専科教員が入り、TT体制での授業が行なわれている。2名配置されている支援員は、1ヶ月毎に「ローテーション」することで、子どもたちは多くの先生とのつながりをもつことができ、安定した気持ちで授業に臨むことができるようにしている。

② 担任交換をして給食指導をする「シャッフル給食」

毎週木曜日は、学級担任が「ローテーション」で入れ替わり、給食コンテナへの配膳・下膳に同行し、一緒に給食指導も行い、その後交流しながら共に給食を食べる「シャッフル給食」を実施している。コロナ禍における「黙食指導」「事前事後の消毒作業」を含め、どの教室においても給食指導・安全指導の標準化がなされることになり、子ども側からするとどの教職員の指導も受け入れるようになり、教師側からすると他学

級の子どもを知る機会（授業以外の子どもたちの別の一面も）となっている。

(4) 「シャッフル道徳」の実施～多様な他者・多様な価値観との出会い～

道徳の授業は原則年間を通じて、連学年の担任が「授業交換での教科担任制」を執っており、評価（通知表や指導要録の所見）も交換して実施している。本校では更に1時間で完結する道徳の教科性を活かして、学期に2回程度（年間6回）「シャッフル道徳」と称して、普段の道徳指導の担任とは違う学級担任が受けもったり、普段は道徳を担当していない特支担任、専科教員、校長、教頭も指導に加わったりしている。「シャッフル道徳」を実施する日は、全校が同じ時間に道徳の授業を設定し、その時間までどの先生が教室に訪れ、授業を行うかはシークレットで計画・実施している。

【担当したクラスの道徳を振り返って】

- よくも悪くも、普段指導している教科の時とは異なる児童の姿を見ることができた。
- 日頃授業では関わったことのない子どもたちがどんな考えを持っているのか、どんな反応をするのか感じることができた。
- 教科担任制の延長として、1回限りの道徳と考えると、あまり負担なく取り組める。
- 全校児童を全職員が指導・支援・見守る体制づくりへの1つとしてもよい機会としていく。どの先生が授業を行うかを事前に子どもたちに知らせておかないため、「わくわく」する新鮮味がある。
- 他クラスで授業をすることになるので、多少の負担になることも。（事前に担任と話す時間が必要）
- 実態が分からないので、発言を予想できにくく困った。終末をまとめられず尻つぼみ感があった。
- 日常とは違う雰囲気子どもも自分たちも楽しみながら、道徳ができるとうい。子どもたちの取組のよさ・気になる点を担任に伝えていく。

【子どもたちの様子】

- たくさん意見を出してくれた。アイマスク体験などの活動も入れたので、相手の立場になって考えやすかったと思うが、それでも相手の気持ちを考えることが難しい子もいた。
- イベントのように楽しんでいった方がよいかも。その先生らしい「特別授業」の枠でやった方がよい。
- いつもと違った中で授業を受けることで、子どもたちも普段と違った思いで授業に臨んでいる感じがした。教師にも児童にも必要な時間でないか。
- 「AかBか」という対立構造の方が、意見が持ちやすい子も見られた。子どもたちに意見を出させるきっかけに、挙手だけでなく、指名も効果的。
- 焦点化（「けがは健のせいじゃないよ」「健を応援してくれる人もいるよ」など）することで、つぶやきが増えてきた。

「今回はどの先生が授業をするのかな」「どんな道徳

の授業をするのか」と子どもたちは楽しみにしている姿が見られた。また、この時間に授業の担当に当たっていない先生方は、**全学級を自由に参観**できるので、**よい研修の機会**にもなっている。更に、授業後には、授業担当から担任に「〇〇さんはこんな考えを発表していました」と学習カードを見せながら、**授業の様子を語る姿**が職員室の中で見られた。多くの学年の授業を受けもつことで、子どもたちの名前を覚えることから始まり、**子どもたちの考えのよさにも目を向けて**取り組むようになり、**全校の子どもたちとのつながりも深まっていく機会**となっている。

(5) 自学 OKC ノートの「ローテーション」「シャッフル」による支援・助言・評価 ～子どものやる気を引き出す多様なコメント～

自学自習を進めるため、昨年度より全学年一斉に「宿題」とは別に「**自主学习**」のための「**自学OKCノート**」を導入。取り組む内容を決められない子へのサポートとして、**選択プリント棚を設置**し、そのプリントを自分で選べるように環境整備、帰りの会で自学ノートに「ねらい」(内容)を記入する時間「**プランニングタイム**」を確保、自学ノートの内容を見合うことができる**交流掲示板を設置**した。

更に、**担任の評価・コメント記入の負担軽減**のため、曜日によって管理職(校長・教頭)コメント day、専科特支援担任コメント day、担任コメント day と**分業化**し、**全職員が全校児童を指導・支援・見守る体制**を整えた。

2年目は「ローテーション」「シャッフル」という意識が浸透、「**一人一人の教職員の意識改革**」と「**職員構成が変わっても対応していく体制の構築**」が整ってきたと考えられる。また、様々な先生方の子どもたちのやる気を引き出す多様なコメントがノートの各ページに積み重ねていくということは、子どもたち自身だけでなく、他の先生方にとっても、どんなコメントを書いているかを教職員が互いに読み回すことができ、よい研修の場にもなっている。

3 研究のまとめ(次年度への課題)

(1) ビジョンの全職員による共有

今年度から本校でも本格的に導入を始めた教科担任制と連学年合同授業。本校でこれらをスタートするために大切にしてきたことは、「**始めに教科担任制導入・連学年合同授業導入ありき**」ではなく、「**どうしてそれらを導入するのか**」「**何のためにそれらを導入する必要があるのか**」という**ビジョン**を全職員で共有してきたことである。その柱となるビジョンが「**全職員が全校児童を指導・支援・見守る『多様な学び』の創造**」であり、根

底には一村一校小規模校の閉塞感から来る「**固定化された人間関係の打破**」という脈々と続いてきている課題があったからだ。その突破口となったのが、偶然性・多様性の価値観につながる「**ローテーション**」と「**シャッフル**」という**発想**であった。

(2) 「ローテーション」「シャッフル」のトライ&エラー

今回、ここに掲載した「ローテーション」や「シャッフル」のいくつかの取組は、学校長による「**まずは、やってみる**」「**やってダメだったら修正・改善する**」という挑戦的なマネジメント(試行錯誤=Try&Error)に後押しされたものであった。実際にやってみたことで

○子どもたちにとって

- ・複数の教職員のアプローチで学び方を広げられる。
- ・自分を分かろうとしてくれる目が増えることで、安心の場が増える。

○保護者にとって

- ・我が子を知る教職員が増えることで、相談できる窓口が増える。

○教職員にとって

- ・学級以外の子も授業を通し自分の教え子となり理解を広げられる。
- ・自分の得意な分野を活かすことができる。
- ・前後の学年を含め指導に系統的なイメージをもった指導ができる。
- ・学年を越えた職員間で授業等の相談、会話をする姿が増えた。

といったことを実感できた。「ローテーション」「シャッフル」そのものに対する価値観も多様であり、また「ローテーション」「シャッフル」によって生み出される不都合や課題も多様なため、すべてがうまくいくわけではない。改善の方向を示したら「**PDCA サイクル**」を回し、その都度よりよい方向への修正を「**ためらわず**」「**少しずつ**」「**試行錯誤を繰り返しながら**」積み重ねていきたい。

(3) すべては子どもたちのため

今回の取組によって、教科担任の出張や急な休みでも自習でプリントを行うのではなく、空き時間の先生が授業を進めることが可能となり、授業が止まることなくなくなった。また、教科担任制により生まれた空き時間に、教材研究や学級事務を効率よく進めて、先生方の退勤時刻が確実に早くなり、働きがいの感じる働き方改革も進みつつある。更に、教職員一人一人の意識改革を一層進め、毎年職員構成が変わっても対応していける体制を構築していくことが急務である。**すべては子どものため**(固定化された人間関係の打破、自己肯定感の育成、新たなことへの挑戦、受け身的な姿勢から主体的な姿勢へ)が出発点ある。

今年度の教科担任制の成果を元に、今後も子どもの側に立った授業づくり、環境づくりを通して、「**全職員が全校児童を指導・支援・見守る『多様な学び』を創造できる学校づくり**」を組織として進めていきたい。